

書評

小船井光太郎, 渡辺弘之 監訳

症例でつかむ心不全

北里大学医学部循環器内科学

猪 又 孝 元

カテーテル診療の領域で一世を風靡し、現場を席巻し続けるライブデモンストレーション。あの興奮を心不全の世界でも表現できないか—この10年、わたし個人の目標のひとつであった。ライブは、なぜ興奮するのか。それは、多岐にわたる病変ごとに、神の手たちが論理立てて最善策を提示し、それを実現していくからである。キーワードは、バリエーションへの対応, tailor-made therapy というやつである。

心不全は多種多様な症候群である、とは教科書の常套句である。ならば、心不全の世界こそ、ライブの熱狂に似つかわしい。心不全診療の極意は、症例検討でしか表現できない。脚本書きこそ醍醐味である。今や、診断や治療における道具立ては数知れない。エビデ

ンスに基づいた診療 (EBM) が半ば常識化した現在、有効だとする根拠なしに、道具が現場に登場することはない。しかし、統計学上の有意差やハザード比が、診療全体のなかで重み付けを決めるとは限らない。多くの道具をどう取捨選択し、どの順番でどう診療フローを組み立てるか、いくら論文を読みこんでもなかなか回答は得られない。「臨床シナリオ」を語る時代が到来したのである。

本書を手にし、悔しい思いが先走った。ライブはライブであって、多くは活字にするとライブ感が失われる。筆無精も相俟って、自分自身ライブを紙にする機会を先延ばしにしてきた。しかし、本書は、ライブ感をきわめてバランスよく表現する、心不全では初めてのテキストではないだろうか。

雑多な症例と日々葛藤する東京ベイの先生方が翻訳に当たられた人選もまさに妙であった。まずは、心不全ライブに参加しよう、本書を手に取りながら。

あえて、ひとつだけ注文をつけさせていただく。心不全の概念を変えた大きな進展のひとつに、2005 年米国ガイドラインで提唱されたステージ分類がある。心不全は慢性に進行し、リスク因子から終末期、死に至るまで連続する病態との考え方である。今後、爆発的に増加するであろう心不全患者「群」を目の当たりにし、ここで扱われた治癒近くへと向かえる有徴候性心不全例はその比率を下げていくかもしれない。すなわち、ステージ B への先制医療と、デバイス・移植への道を進まぬステージ D の終末期医療といった、入り口と出口への対応である。本書の続編を待つ時間もまた楽しからずや、ではあるのだが。

[A4変 272頁 2015年 定価
(本体 6,800 円+税) MEDSi
刊]